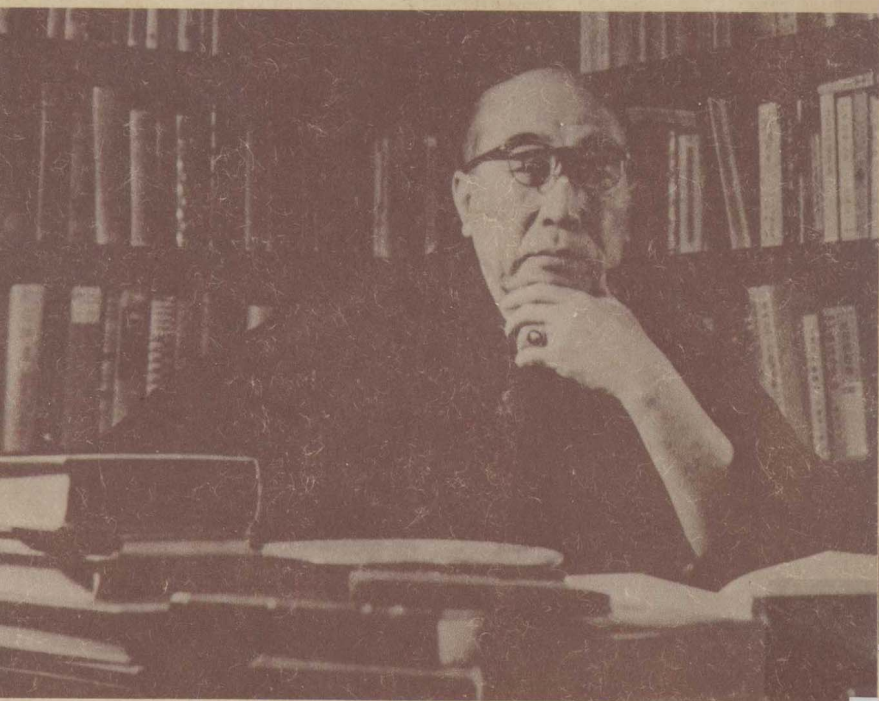
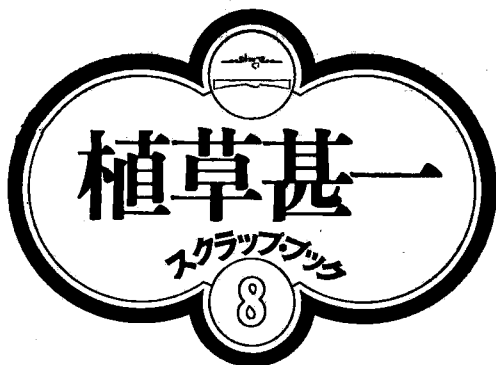




江戸川乱歩と私



晶文社



江戸川乱歩と私



晶文社

植草甚一スクラップ・ブック 8

江戸川乱歩と私

一九七六年五月一五日印刷

一九七六年五月二〇日発行

著者植草甚一

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇二二

電話東京二五五局四五〇一(代表・四五〇三(編集))

振替東京六一二七九九

中央精版印刷・美行製本

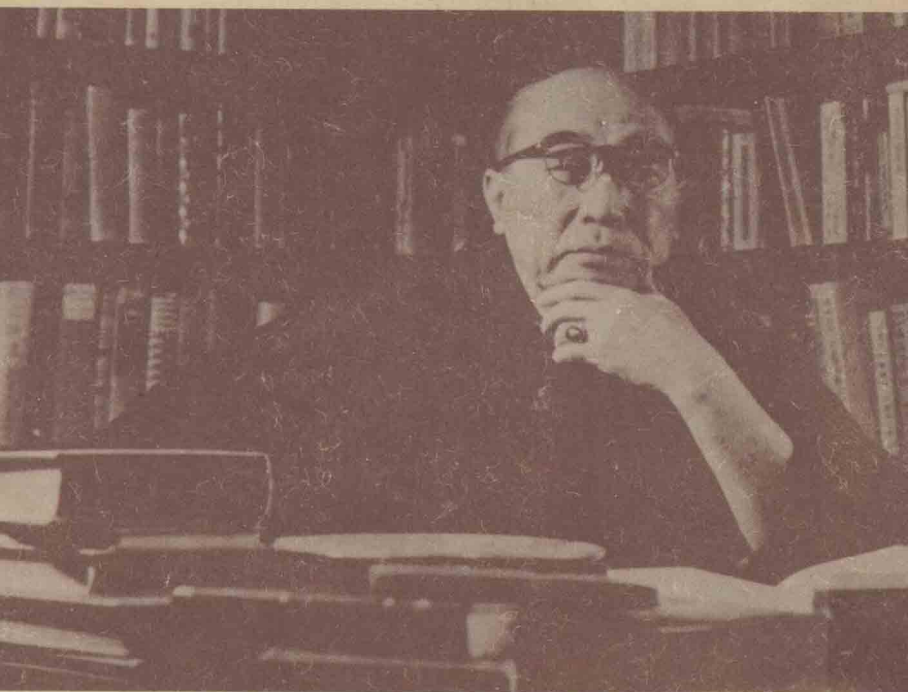
ブックデザイン平野甲賀

©1976, Jin'ichi Uekusa

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします



江戸川乱歩と私



晶文社

植草甚一

江戸川乱歩と私

植草甚一スクラップ・ブック 8

江戸川乱歩と私

一九七六年五月一五日印刷

一九七六年五月二〇日発行

著者植草甚一

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一ー二一

電話東京二五五局四五〇一(代表・四五〇三)編集

振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1976, Jinichi Uekusa

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

江戸川乱歩と私 目次

1 ミステリーのたのしみ 15

人気ミステリーの殺し 17

探偵小説のたのしみ 24

パット・マガーをめぐる 33

新しい探偵小説の型と映画への影響 38

欧米探偵小説の新しい世界 48

アカデミー賞から思いついた推理小説「鮮血のオスカー」を読む 54

ミステリー断章 60

詩人オーデンは探偵小説ファン 67

ニコラス・ブレークの推理小説論 74

スリラー小説の研究がすぎだとはのんきな大学教授もいるものだ 84

2 ミステリーの名人たち 101

007がピンボを暴行から救った

103

スパイ小説のぶり返しとイアン・フレミングの愉快なエッセー

107

イアン・フレミングとの最後の対談

119

ミッキー・スピレイン

125

メグレ警部とシヨルジュ・シムノン

132

テレビに出演したシムノンの話から

シムノンのあたらしい作品を読んで

シヨルジュ・シムノン断章

160

149

139

3 ミステリー評 1959→1974

165

E・S・ガードナー「最後の法廷」H・ゼーダーマン「犯罪を追って」

167

ト「捕虜収容所の死」

169

S・B・ハフ「優しい殺害者」

173

デイヴィッド・イーリー「おかわ

り」

174

ハリー・ロングボ「レディにそんな仕打ちをするな」

175

ボワロ・ナルスジャック

「推理小説論」

177

シャルル・エクスブラヤ「サンタ・クルスの夜」

178

ピーター・フォーダム

「泥棒物語——大列車強盗の真相」

179

ハリー・ケメルマン「金曜日ラビは寝坊した」

181

マル

カム・マツガリツジ「恋愛事件」

182

エラリー・クイーン「恐怖の研究」

183

ジョン・ビンガム

「夜の黒い代理業者」

185

レオナルド・シアーシア「ある男の祝福」

186

ジョン・ラング「ジャ

マイカの墓場」

188

エドワード・D・ホック「大鴉殺人事件」

189

マイケル・クライトン「ター

解説…植草甚一と私

都筑道夫

239

- ミナル・マン」¹⁹¹ アガサ・クリステイ「復讐の女神」¹⁹³ ピーター・マッカーティン「マフィ
オーゾ」¹⁹⁴ ルネ・レウヴァン「そそつかしい暗殺者」¹⁹⁶ E・リチャード・ジョンソン「モン
ゴが帰ってきた」¹⁹⁸ タッカー・コウ「蠟のりんご」¹⁹⁹ エリック・ラウトリー「探偵小説のピ
ユリタンのな楽しみ」²⁰¹ マイ・シュウアル、ペール・ヴァール「消えた消防車」ノデニス・
スミス「第82消防班の日々」²⁰³ テッド・ルユイス「殺しのフリーガ」²⁰⁷ アルベール・シモナン
「現金に手を出すな」²⁰⁸ ピーター・ラウゼイ「死の競歩」²¹⁰ デイック・フランシス「煙幕」
²¹² エリック・ラウトリー「探偵小説のピユリタンのな楽しみ」ノ権田萬治「宿命の美学」²¹³ ジ
ョン・ブラックバーン「小人たちがこわいので」²¹⁷ ノーマン&ジャンヌ・マッケンジー「タイ
ム・トラヴェラー——H・G・ウェルズの生涯」²¹⁸ スタンリー・エリン「空白との契約」²²⁰
チエスター・ハイムズ「黒の殺人鬼」²²² カルロ・フルッテロ、フランコ・ルチエンティニ「日
曜日の女」²²⁴ ジョイス・ポーター「天国か地獄か」²²⁵ 筒井康隆「おれの血は他人の血」²²⁷
アガサ・クリステイ「象は忘れない」²³¹ 都筑道夫「死体を無事に消すまで」²³² ジョン・ラ
ング「エデンの妙薬」²³⁵ ピーター・ディキンソン「眠りと死は兄弟」²³⁷

江戸川乱歩と私

1 むかし乱歩さんを訪ねて

ついエチケットを無視して、まるで学校時代からの友だちみたいに『乱歩さん』と話しかけると『うん、なんだい』と返事されるようになってから、もうずいぶん日がたつ。それは戦争がおわってまもなくのことであった。まだダシル・ハメットもコーネル・ウールリッチもクレイグ・ライスもよく知られていなかったし、このあとで乱歩さんはデイクスン・カーに夢中になられたのではないかと思っている。ある日、双葉十三郎さんが池袋のお宅へ一緒に行こうというのでそうした。そのあとでぼくは「乱歩さんを訪ねて」という原稿を五枚書いて、そのまましまっておいたが、これが整理箱のしたから出てきたので、すこしいま読んでみる。

よく晴れた日曜の昼さがりであったが、乱歩さんは探偵小説の研究に余念がなさそうで、白カード

に書いた作家と作品のインデックスをみせながら『きみは探偵小説についてよく知ってるそうだね』と眼鏡ごしに切りだされた。『ジイドがハメットの「血の収穫」をはめているので読んでみたが、おもしろいとは思わなかったよ。チャンドラーも読んだけど、ぼくの趣味には合わない。すばらしいとおもう描写もあるけど全体としてどうか?』ぼくはハメットやチャンドラーのハードボイルド派のアメリカ文学に興味をいだいているというものの、なにぶん研究不足なので反駁ができない。しかしチャンドラーのペンによってアメリカ社会の隠された現実面が怪しげな光彩をはなつとき、ぼくは純粹なアメリカ文学を味わっているのを感じる。

乱歩さんは『クレイグ・ライスは喜劇風の探偵小説が専門かとおもったら、真面目なものも書いてるんだよ。新しいタイプの探偵作家として買うね。ライスはハメットとチャンドラーの流れをいくと向うでいっているが、もっと違ったものがある』といわれ、すこし興奮されたあとで『だが、なんといってもアイリッシュの「幻の女」はいいね。たまらない。うなってしまった。あれば、ぼくが訳すよ』といって嬉しそうに顔をくずされた。

あのころは「幻の女」を訳されるといつてられたな。すっかり忘れていたことを、この原稿を読みかえしながら思いだしたが、その後、乱歩さんはデイクスン・カーの世界に入りこまれてしまったのである。

こんどの「べてん師と空気男」については、まだ何も知らなかったので宝石社編集部に電話をかけ谷井さん、中原さん、大坪さんから、この原稿を書く資料をもらおうとしたが、みんなまだ読んでい

ない。乱歩さんから『こんどのは自信があるよ。カー式にいった新しいアイディアであって、殺人ゲームが主体になっている』ということだけは聞いているが、はやく読みたいってしかたがないというのが返事だった。

探偵小説というものは、予備知識なしにぶつかり、しばらくするうちに興奮させられ、ああ面白かったというふうになっていく読んでいるあいだの楽しみにあるのだから、電話で聞くなんてまったく野暮の骨頂なのである。いま、ぼくの頭のなかには「べてん師と空気男」という素晴らしい題名があるだけで、あとは早く読みたいという期待である。ちょうど、すきな外国作家の新作が出て、それを注文してから待っているまでの気持とかわりがない。

2 江戸川乱歩と私

あいかわらず横尾忠則の絵はいいなあ、とつぶやかないではいられない。それに、こんどのは、いままでの彼の絵とは、どこがちがった魅力があるのではないか。きょうも天気があんまりいいので、うちにジーツとしていられなくなり、経堂からバスに乗って池尻までいった。あすこの横通りに何とかいうデパートがあって、ちょっとした面白いものがあるし、値切るとマケてくれるからだが、その途中の右側に本屋があって、乱歩全集のポスターが店の入口に貼ってあった。

青い色レンズの眼鏡をかけた乱歩さん。つるりとした頭、一人の少女の顔が、半分ずつになって両側にかいてある。その乱歩さんの似顔絵が、またよくできていて、話しかけてくるようだったから、

ぼくは、そのまゑに立ちつくしてしまった。『さあ、横尾君、どこかへ飲みにいこうよ』と、いつものように、すこし目を細くし、うれしそうに誘っている表情。そんなとき、そばには、いっしょについていくお弟子さんが、きまっぴいとも五、六人はいるのだった。

ぼくは、うちに帰ると、また別刷付録になった横尾忠則の五枚の絵を出して、赤や青や黄の組合せに感心したり、幻惑されながら、乱歩さんとおんなじような気持になっていくので、うれしくってしようがない。もちろん、ぼくだけではなく、乱歩さんと付き合っただことのある人たち、みんな乱歩さんにおごってもらった思い出があるだろうが、驚くほど気前がよかったのを、横尾忠則の絵を見ながら思い出し、うれしくなってしまふにちがいない。というのも、いま目のまゑで乱歩さんが『いいねえ、横尾君の絵は』といっているのが聞えてくるし、とても喜んでゐる顔が、ありありと浮んでくるからだ。

五枚の絵のなかで、どれが一番いいかな。ぼくは、やっぱり「屋根裏の散歩者」が一番いいな、と思ったし、いままでの彼の絵とちがった魅力を感じたのも、これを見た瞬間だった。下宿の屋根裏を這いまわる三郎。あれを読んだときは、ぼくも屋根裏にさがりたくなつたが、うちのは詰らないので、やめたっけ。よく乱歩さんは『ぼくが書いたもので、いいのは、最初の三つくらいだよ。あとは情なさ』といったのが耳についてゐる。そんなときは『じゃあ「陰獣」は?』と訊きかえしたくなつてくるのだったが、いま「屋根裏の散歩者」を読みなおしていると、フランスの連続活劇「プロテア」のことが出てきた。三郎は、ずっと以前に見た女賊プロテアの黒装束姿で屋根裏の冒険がやりたくなる

のだが、このあたりの何気なく書かれた文章には、じつはマゾ的エロティシズムが隠されているのだ。「プロテア」という題名は、訳せば「変装した女」となるが、大正七年に日活系洋画館で毎週二巻ずつ上映された十二巻もので、ぼくは大正十二年に、四谷日活館で半分の六巻だけ見た。それから姿を消してしまい、日活の倉庫で眠ったままだったが、ずっとあとで火事があったから焼けてしまったにちがいない。フランスでも再上映された話は聞いてないから、やっぱりないのだろう。けれど、なにか見たい映画があったら一本だけあげるといわれると、ないものねだりの「プロテア」ということになる。というのも、こんなにもマゾヒズムの心理を満足させる映画には、ついに二度とお目にかかる機会がなかったからである。

プロテアに扮した女優はジョゼット・アンドリオといって七十キロくらいありそうな背のたかい豊かな大女だった。乱歩さんは黒シャツと書いているが、薄い黒絹地で、それが足のさきから指さきまでピッタリとついていて、真っ裸とかわりがない。当時は弁士が説明をつけたが、ピストルを片手にした黒装束のプロテアが出てくると黙ってしまうのは、やっぱり見とれていたのだろう。とくに海上の場面になり、沖合の潜水艇から抜手で海岸についたプロテアが、黒装束のままビショ濡れになっているところなんか、目ははなせなくなるようなエロティックな姿態だった。

「屋根裏の散歩者」が書かれたのは、大正十四年だったから、ながいあいだ黒シャツのプロテアが忘れられなかったにちがいない。そのへんの話を聞いておけばよかった。いま思い出すのは、ある晩、高級バーで、みんなと一緒に過ごしているとき、ぼくが「D坂の殺人事件」を読んだとき、

とても感心しちゃったという、そばにいた乱歩通が、いや「二銭銅貨」だよ、とか「心理試験」だよとかいうので、そのまま引きさがったことだった。

いいのは最初の三つぐらいだよ、と乱歩さんがいったのは、これらの三作かなと思いつながら、さっきから読んでいたが、文章に味があるのは「D坂の殺人事件」が一番じゃないか。それに、いかにも乱歩さんらしい気持が書きこんである。それは明智小五郎にたいする初印象だ。

『私が近頃この白梅軒で知合いになった一人の妙な男があつて、名前は明智小五郎というのだが、話をしていると、いかにも変りもので、それが頭がよさそうで、私の惚れ込んだことには、探偵小説好きなのだった』

そうだったなあ。ぼくは、たいていの人の名前をあげることができけれど、こういう頭のよさそうな変り者が、乱歩さんの周囲にあつまつたのだった。それにしても、乱歩ファンでなければ描けないような、それこそ乱歩さんが相好をくずして喜んだにちがいない挿絵をものにした横尾忠則を呼んで、どんなおごりかたをしたか、もうこの目では見られないのは、なんという残念なことだろう。